
英国図書館と19世紀刊本マイクロ化

事業計画について

英国図書館顧問・NSTC編集責任者 Dr. R. C. オルストン 述

早稲田大学図書館 山本信男 訳

付・早稲田大学明治期資料マイクロ化事業計画（大要）

この論文は、1986年12月3日、早稲田大学大隈会館において行われたオルストン博士の講演のレジюмеを翻訳したものである。

英国図書館について

1 1973年に大英博物館の図書館部が独立して英国図書館となった。それ以来、幾多の変遷を経て、19世紀に創設された当時とはまったく異った現在の図書館ができあがっている。英国図書館の蔵書は、あらゆる分野、および、言語に及んでおり、その優秀性は、図書館の創設者ともいべきパニッツィの意欲的な指導力に負う所が大である。彼は、古代のアレキサンドリア図書館が果たしたのと同じ役割を大英博物館の図書館部が果たすべきだと考えていた。すなわち、大英博物館図書館部を研究目的のために人類の記録文化を保管しておく場所と考えていたのである。あらゆる資料を例外なく収集し、一般に重要とされる資料とくだらない資料と考えられているものを、すべて区別なく収集した。蔵書構築はきわめて体系的で包括的に行われたのである。

2 1840年から1960年代に収集された膨大な資料（納本、交換、および、購入によって収集されたあらゆる資料）の利用は、印刷目録を通じて行われていた。すなわち、General Catalogue と呼ばれているもので、1900年に第1巻が刊行され、現在では2000冊以上に及んでいる。この印刷目録は現在大閲覧室（Reading Room）に備え付けられている。その他、特殊分野および特定の時代に関する印刷目録もある。これらの目録類は、Catalogue of Fifteenth Century Books [BMC] のような蔵書目録から、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、オランダ語、ドイツ語の文献についての総合目録にまで及んでいる。この種の目録としては、ほかに写本部の目録、東洋写本および刊本部の目録、および新聞文庫、音楽文庫、地図文

庫などの目録がある。1875年（この年に個別印刷目録が作られはじめた）から現在までに、印刷目録を通じて2000万冊以上の文献資料が利用可能になったとされている。英国図書館の最新の所蔵調査によれば、棚の総延長はロンドンからアパーディーンにまで及ぶといわれている。通常の専門職の数が30名にも満たなかった1875年から1900年の間に、大英博物館図書館部は300万冊以上の文献についての目録を作成し公開したのである。

3 1945年以降、世界の出版物が記録的に増加したために、毎年図書館が収集する資料についての整理問題が、図書館がかかえる大きな課題となっている。1960年代に機械化目録が作られるようになり、この緊急の課題に対処するための方策としての1つの希望の灯となった。1つの標準化されたルールに問題がなければ、それぞれの図書館は、他の図書館の目録を機械的に引き出して使えるようになったのである。国際的な相互協力の精神は、確かに無駄な目録作業を省力化できる希望を与えてくれたように思う。しかし、残念ながら希望していたような事態とはならなかったのである。すなわち、1つの標準化された規則はできあがらず、30種類ものMARC用の規則が作られ、AACR2の例外規定や修正条項にいたっては、現在では本文以上の量にまでなっているのである。疑いもなく、世界中のあらゆる図書館が、未整理本の山に嘆息をついているのである。英国図書館でも、英語および外国語の図書、音楽や地図、写本類の未整理本が、現在13万冊以上にも上っている。

4 大きな研究図書館において政策決定をする場合には、その図書館の過去からの伝統というものが、重要な要素として働くことは避けられない。英国図書館は、ただ単にオックスフォード大学のボトレイアン図書館(Bodleian Library)のように国内的な重要性を持っているというだけでなく、国際的な重要性を持っており、このことは一般にも認められている。しかし、英国図書館がこの伝統的な責任を果たしてゆくことに関して、国際的な直接援助は何も受けてはいない。そして、最近の予算削減によって、われわれは、資料の収集・保存方法を再考せざるを得なくなってきている。何を優先させるべきかについての周囲からの諸要求は、いずれも一方的なものばかりであり、蔵書検索の方法を、従来のマニュアル式のものから機械可読式に変換する仕事は、目今の処理すべき仕事のために以前より困難になってきている。かなり以前から、技術的な進歩によって、キーワードを付け直さずに書誌データを容易に検索できるようになってきている。しかし、たとえ検索が簡単になっても、機械可読形への変換は、検索をより簡単にし、適確な検索をするための方向へ向っての1つのステップにしか過ぎないであろう。何故なら、作成される各種のファイルは、オリジナルデータとして、印刷目録やカード目録の時代と同じよう

な役割を果たすものであり、また利用できるものであるからである。ルネッサンス以来図書館が抱え続けてきた問題、すなわち、書誌データの精度を高めるという任務は、依然として存在するであろう。

5 英国図書館が現在早急に手がけるべき仕事は当然のことながら、英国図書館の蔵書検索の主要な手段となっている General Catalogue の MARC への変換である。セント・パンクラス (St. Pancras) に新図書館が建設されているが、この General Catalogue の MARC 化がきわめて重要な意味を持っている。それは、2カ所に分れた図書館が1つの図書館として機能するための成否が、この変換にかかっているからである。また、目録の MARC 化は、機械による図書検索システムの進展とともに、図書保存政策にとっても中心的な課題となっている。現在、地図および音楽図書館の蔵書(最近収集したもの)についてのコンピューター化はかなり進んでいるが、写本についての目録および検索についての機械化は、今なお考慮中である。新聞については、特に難しい問題があるが、印刷目録の機械化は現実的であり、費用削減にもつながるであろう。また、研究者にとっては、現在では不可能な検索の手段をも与えてくれることになるであろう。

6 大英博物館図書館部の伝統を引き継ぐ重要な仕事の1つは、英国図書館にとって欠くことのできない蔵書目録である General Catalogue の補遺版を作ってゆくことである。その補遺の方法は General Catalogue の小型版を作るとか主題分野毎の目録等のような特殊目録を作成することによって行われるであろう。英語で書かれた文献については、1882年に Bullen が最初の補遺版を出している。この補遺版を契機として、現在世間にその名を知られた印刷目録である STC や Wing が作られたのであり、イギリス、アメリカおよびオーストラリアの各国が所蔵する図書資料について各種の補遺版が作成されていったのである。

7 最初に18世紀刊本について大英博物館図書館部の伝統を引き継ぐ作業を行う必要があると判断して、英国図書館理事会が、さまざまな曲折を経ながらも1976年に、非常に重要な決定を行った。その決定に基づいて行われた作業の成果というべきものが ESTC であり、これは、世界最大の遡及 MARC であり、現在5つの大陸に存在する950の図書館の蔵書を基にした100万箇所以上の所在情報を持った約20万点の文献を収録している。100年前に Bullen の印刷目録がモデルとなって各種の目録が作られていったように、ESTC は、ドイツ、オランダ、スカンジナビア地方、スペイン、オーストラリア、および、ニュージーランドの各国における遡及 MARC 作成計画のモデルとなっているのである。

8 明確な原則に基づいて作成されている ESTC の経験をもとに、英国図書館は、大きな財政上の圧迫にもかかわらず、19世紀刊行物の大部分をマイクロフィッシュ化する計画を援助し推進することができると判断した。このマイクロフィッシュ計画のなかには、高度なものではあるが達成可能な基準に基づいた MARC の作成が同時になされることが含まれている。この MARC を作成するということは、研究の重要性に対して、英国図書館は強力な支持を惜しまないという態度の表明でもある。また同時に、多数の重要な文献の存在そのものを回復不可能な劣化におとし置いてしまう危険がある現在の絶望的な資料保存の危機状況に対して答えることでもある。

9 今日、すべての図書館は、過去の図書資料の保存と、同時に調査研究目的のために所蔵資料を利用させなければならないという相矛盾した2つの重要な図書館の機能の調整に頭を痛めているに違いないと思う。この問題に対する解決方法は容易ではない。しかし、勇気と想像力をもって考えれば、多くのことをなしうらと思う。技術的な進歩によって、前記2つの機能を同時に果すことのできる可能性はあると思う。デジタル信号を使って記録する方法、すなわち、マイクロフィルムを作るのと同じ手続で、光ディスクに記録しその記録を即座に検索できる方法は、1つの解決策となるだろう。技術の進歩がもっと進めば、デジタル化された印刷物を読みとって普段われわれが使っているアルファベットに変換する、いわゆる物を判断できるコンピューターの開発によって、もっと多くの解決策が考えられるであろう。このようなコンピューターの開発は、連続した体系的に記録されたもの、例えば公文書館の所蔵する資料のリストのような組織化されている一団の歴史資料を総合的に検索し利用する場合に、大きな便宜を与えてくれるであろう。印刷目録に関していえば、データベース作成にとって欠くことのできないフィールド毎のタグ付けの問題を未だ解決してくれはしないが、少くとも変換の作業を軽減してくれるであろう。技術が進歩すれば、フォーマットを自動的に見分けて判断することも可能となるであろう。ただし、そのためには原本が印刷されていることが必要である。何故なら、印刷されている物はデジタル化することによって整備されたタグに変換することが可能だからである。

10 現在図書館が直面している問題は複雑多岐にわたるが、私は技術的な進歩によってこれらの問題を解決できると考えている。ただ問題は時間的に問題解決に間に合うかどうかだけである。しかし、ただ予測しているだけでは無責任であり、Micawber 氏がいうように、図書館は将来も実際に利用できるものを使ってゆくであろうし、従って現代に生きるわれわれも現在利用できる技術を使って問題の解決を図らなければならないのである。

11 英国図書館が声を大にして訴えていることであるが、資料保存の危機的な現在の状況は、非常に難しい問題をわれわれに投げかけている。部分的には、われわれが手を加えることによって資料の状態をよくするよりもむしろ悪くしてしまった明白な過去の事実がある。すなわち、中世に作られたパーチメントに書かれた写本の製本を直す場合に、不適切な付属品を使ってまずい製本に仕立て上げてしまったことがある。このような不適切な付属品を使うことによって、劣化をむしろ速めてしまい、再び製本し直すのに莫大な費用がかかってしまうのである。ケンブリッジにある Corpus Christi College に寄贈された Parker 大主教の20冊の写本が、約40年前に製本し直されたことがある。この再製本の結果、20冊の写本は悲劇的な状態となってしまう、現在完全に利用できなくなってしまう。今世紀初めに使用され始めた薄いカバーで本をおおう方法は、ほとんどの場合本を保護するよりも、本そのものを破壊してしまう結果になっている。過去に間違いを犯した事実の記録を作成しておくことは非常に大切なことである。疑いのないことであるが、資料の保存に携わっている人々は物事に保守的な人が多く、適切でない取扱いをするよりもむしろ放置しておく方がより親切だと考えている人達が多い。英国図書館が保存用マイクロフィルムを重要視し、原本の利用に厳しい制限を加えることに決定したのはそのためである。そして、英国図書館と Chadwyck-Healey 社が、けわしい道ではあるが、1つのロマンを持って19世紀刊本のマイクロ化を始めたのもそのためなのである。

19世紀刊本マイクロ化事業について (The Nineteenth Century)

12 19世紀に刊行された図書館資料をマイクロ化しようという企画には、多くの問題点があった。これらの問題点を現実的な方法で解決するために数カ月を要した。どのような手順を経ようとも、この企画の成否は英国図書館の協力如何にかかっていることは明白であり、初期の段階から図書館のあらゆるレベルの館員の協力を得ることが必要であった。この企画が、英国図書館の日常業務にどのような影響を及ぼすかを評価するために、すべての作業手順をチェックする必要がある。そうこうしているうちに、この企画は1985年に英国図書館理事会の承認を得ることができ、1986年3月に作業が開始された。

13 作業手順を実際にチェックする前に、編集委員会と協議して何をマイクロ化の対象とし何を除外するかという編集方針を確立しなければならなかった。この作業は非常に難しいものであったが、編集方針(少くとも近い将来に適用するための)が作られ、“Subject Scope and Principles of Selection”という印刷物として発表されている。最初の段階から、19世紀刊本をマイクロフィッシュ化するというこの企画には、個々の書誌データを MARC 化するという計画がともなっていたの

であり、そのために、英国図書館の整理技術スタッフと協議しながら、MARC化の基本となる目録規則を作ることが必要であった。この目録規則は、現在“Cataloguing Rules”という1冊の本にまとめられ、このなかで詳しく説明されている。

14 この企画を実行してゆく最初の作業は、英国図書館のシェルフリストを使って収録すべき資料を選択することであり、現在もこの作業は続けられている。このシェルフリストの基となっている分類基準は1843年に作られ、1877年に改訂されたものである。その分類についての考え方は、大部分がBrunetの考えた分類表に基づいている。彼の分類についての考え方は著名な“Manual”にまとめられている。英国図書館のシェルフリストの使用は、以前は館員だけに限定されていたのであるが、この企画を進めるためには最初の段階でこれらのシェルフリストを調査することが必要であった。それは英国図書館の展開分類表がビクトリア朝時代の知識に対する考え方を反映したものであるということの信ぴょう性が得られると考えられたからである。最近のものであるが印刷されたものや手書きの資料を基にして作られた英国図書館内で現在使用されている分類のためのガイドは、“The Arrangement of Books in the British Museum Library 1843-1973”にまとめられている。マイクロ化するための資料の選択を体系的・組織的に行うために、この企画に参加しているメンバーは、英国図書館のなかで特別の権限を与えられている。そして、この19世紀刊本のマイクロ化計画に従事しているメンバーが19世紀から受けついできた英国図書館の知的水準を守ることができるのである。

15 この企画は既存の書目類を基にして作業を進めるものではない。従って、英国図書館のシェルフリストから選び出されたすべての資料は、編集委員によって収録すべきかどうか調査され、書誌データについても詳しく調べられることになっている。この作業はつまらない資料を除外するためであり、同時に重要な増補や編集改訂がなされていない19世紀に作られたリプリント版を排除する作業でもある。ある資料を収録するかどうかを判断する重要な要素は、その資料の書誌的な変遷である。何回もリプリントされている資料は特に調査を必要とする。そして、原本として重要な意味を持つ版だけがマイクロフィッシュにされるのである。この企画の目的である英語で書かれた19世紀刊本のマイクロ化は、編集委員会で選定された各主題分野でほとんど網羅的にカバーされるであろう〔前記 Subject Scope and Principles of Selection 参照〕。しかし若干のものについては、選択して収録することになる。すなわち、選択して収録されるのは科学、技術、法律、および、医学の各分野のものである。これらの分野の資料については、現在のところ特定の専門家にしか利用されない高度に専門化された資料は除外することになっている。

16 この事業が進行し、英国図書館の図書分類に基づく各分野が完全に調べられた後は、他の主要な研究図書館の蔵書が調査され、必要とされる資料がこの企画に収録されることになっている。それらの図書館のうち、このマイクロ出版計画に全面的に賛成している Bodleian Library の蔵書が最も重要なものとなることは疑いのないところである。現在刊行中の“Nineteenth Century Short Title Catalogue”が、他の図書館に所蔵されている資料についての貴重な情報源となるであろう。

17 この企画のユニークな特長の1つは、北アメリカ、ヨーロッパ、およびオーストラリアの主な書誌ネットワークを通じて、マイクロ化される各資料についての MARC レコードが備えられるということである。これらの MARC のデータは、National Register of Microform Masters のために英国図書館で現在作られているデータと内容は同じものである（ただし、少し詳細なものになるが）。そして、このことは、英語で書かれた19世紀刊本の世界最大のコレクションとマイクロ出版社を結びつけて出版することを決定した英国図書館の決断の重要性をきわだたせている。NSTC の定期購入者は、MARC のデータを、MT の形で毎年その補遺版を入手できることになっている。あるいは、年間の補遺分をマイクロフィッシュ版で要求することもできる。実際に使用する場合の便宜を考えて計画したこの出版計画の1つの特長は、書誌的には別個のものである資料とマイクロ化によって作られる個々のフィッシュを、明確に関連づけようとすることであり、これは MARC のデータを使うことによって適確に同一化できるように関連づけることによってなされる。

18 伝統的にマイクロ出版事業は、出版のもつ1つの基本的な命題、すなわち出版すべきものの選択が最も重要であるという一貫した命題にほとんど無関心であったように思う。大抵の場合、マイクロ出版計画は、ある特定の図書館に所蔵されている同種の資料を無秩序に撮る傾向にあった。あるいは、信頼できる書誌が作られているものについて対象とする傾向があったように思う。英語で書かれた初期の刊本については、STC や Wing のようなすぐれた目録に基づいて作られた完全に網羅的なマイクロフィルムのコレクションがある。このような網羅的に収録したマイクロ資料のコレクションを作ることは、確かに1つの有効な方法であろう。ただし、網羅的に収録した場合には収録資料がある程度重複してしまうという事態は、必然的に避けられない。

学問研究というものが、資料の増加（その大部分はリプリント版や異った刊行形式であるが）によって進歩向上が図られるものであるかどうかについては少々疑問がある。また、保存の立場から見た場合には、特に適切なものとは思えない。その理由は、木材パルプが紙の生産に導入される以前に、それぞれの時代の文化を理解

するために必要な古い印刷資料の多くは、北アメリカおよびイギリスの主要な研究図書館に、貴重書として完全な保護の下に保管されているからである。1700年までに刊行された資料については、STC および Wing の例に見られるように、収録されている資料の5%弱のものが今まで知られていなかったものである。18世紀の刊本については、この数字はおそらくもっと高くなるであろう。すなわち、多分寿命の短い資料の存在する割合がもっと高くなるからであり、マイクロ出版社から見放されてしまった種類の資料が多くあるであろう。1700年までにイギリス連邦の諸国で印刷された資料のうちで、重要な資料とされるもので簡単には利用できないものの数は、15000点弱である。主な著作については、ファクシミリ版が作られている (Scholar Press に在職中、私は2000点以上を出版したし、1900年代に出版された他の出版社のシリーズのなかで、少くとも1000点は刊行されている)。しかし、マイクロ出版に携わっている人達は、企画を立てる際に知的な仕事をするを考えず、むしろ派生的なものだけを考えている。このことは、特に強調しておきたいことである。

19 出版の正道からはずれた派生的な出版事業は、それなりの魅力がある。すなわち、経費があまりかからないこと (既に作られている書誌を使ったり、図書館の蔵書目録を利用する方法)、編集や製作作業がこうるさい建前論によってじゃまされないこと、購入しているものが欠落のない完全なものであるとか過去に実績のある出版社のものであれば、お客が熱心に受け入れてくれるものであること、等々である。

20 “The Nineteenth Century” は、従来のマイクロ出版とはかなり異っている。それは、この刊行計画が最初から学術出版の一種と考えられていたからである。このことが、このプロジェクトに携わる人々とこの企画に参加を表明したいいくつかの図書館の双方に、かなりの重荷を負担させている。数十万冊の図書を調査して、それらの図書をこのマイクロ化計画に加えるべきかどうかを決定しなければならない。ある図書が頁の欠落等により不完全なものであれば、別のコピーを調べなければならない。また、それぞれの図書館や内部部局が以前から決めているやり方に充分考慮する必要がある。例えば、英国図書館の場合、マイクロ化するために書庫から外部に持ち出す時は、すべて保存部の担当職員の調査を受けた後でなければならないことになっている。すなわち、彼等がこわれ易い状態にあると判断した図書については、その現状を英国図書館のなかの撮影室でフィルムにとり、製本に大きな損傷を与えていると思われる場合は、マイクロ化の許可を時には取消す必要がある場合もある。このような場合には、別のコピーを探し、マイクロ化するために同じような手順をふまなければならない。同じように本を書庫に返す時にもすべて

の本について調査し、必要な場合には保存部で修理されて書庫に戻される。編集作業は、図書館利用者の利用要求に応じる必要から、常に中断される。そして、この種の編集作業の途中にある図書の返却は、書庫へ戻すのではなく編集室へ返すための手続がとられなければならない。

21 たとえどのような綿密な計画を立てようと、ある出版計画が広い範囲にわたる学術研究のすべての要求を満たすことは不可能である。実行段階で理由があると判断して収録から除外したことが、後日になって間違っていたと考えられることもありうる。明らかに取るに足りないと思われたものが、以前には考えられなかった新しい意味を持ってくるといふいやな性質をこの種の資料は持っている。科学史を研究している人は、高度な技術書を収録しなかったことを遺憾に思うかも知れないし、教育史の研究者は、教科書類を除外したことを残念に思うかも知れない。しかし、19世紀にイギリス領であった国々で出版された膨大な数の出版物を考えると（100万点以上と推定される）、現実にはある種のを除外せざるをえなかった。たとえある種の資料が除外されていようとも、この企画が完成した暁には、19世紀研究にとって欠くことのできない膨大な数の図書資料を利用することができるようになるのである。また、この企画では、収録された個々の資料についての詳細な書誌記述を含んでいる MARC の作成が同時に行われており、この MARC の作成によってこれらの膨大な図書資料の検索および利用が格段に高められるであろう。

Dr. Robin C. Alston 略歴

1933年トリニダード生れ。ブリティッシュ・コロンビア大、オックスフォード大、トロント大にて英語英文学を学び、ロンドン大学より博士号を取得。リーズ大学にて10年間英語英文学を講じ、現在英国図書館顧問。ESTC 編集主幹、NSTC プロジェクト総括責任者。

A Bibliography of the English Language 1500-1800, 12vols., The Eighteenth Century Short Title Catalogue 他、書誌情報に関する執筆多数。

早稲田大学 明治期資料マイクロ化事業計画（大要）

早稲田大学明治期資料マイクロ化事業委員会

早稲田大学では、外国における STC および ESTC、NSTC にならい、明治時代に刊行された図書資料のマイクロ化を行うことに決定し昭和62年6月から事業を開始した。

1. 意義

最近、紙の劣化が大きな社会問題として取り上げられ、酸性紙による印刷文化崩壊の危機が叫ばれている。普段何気なく使っており、半永久的に生き長らえるものと考えていた紙にも、人間と同じく寿命があることが判明した。いわゆる酸性紙問題である。

明治のはじめ、日本の近代化を図るために西洋の知識や技術が日本に輸入された。紙の製法や印刷技術も西欧化された。これに伴い洋紙は酸による紙の劣化という和紙にはない問題をかかえることになった。近年の研究によれば、酸性紙によって作られている印刷資料の寿命は、約100年間しかないと言われている。わが国に西洋の抄紙法が採り入れられたのが明治の初期であり、酸性紙の主な原因といわれる木材パルプの生産が始められたのが、明治の中期である。すなわち、わが国において問題の酸性紙を用いて出版が行われはじめてから、約100年を経過しようとしている。このことは、明治中期から印刷されはじめた洋紙による図書資料が、紙の劣化によって崩壊する状況にあることを意味している。わが国近代化の経緯を記録した重要な印刷資料が、この世から消滅してしまうかもしれないのである。国立国会図書館等の調査によっても、明治初期および中期の印刷資料の劣化が激しく、緊急な処置を要することが明らかである（図書館研究シリーズ No. 24）。外国においては、早くからこの問題が取り上げられ、この課題に対処するためのいくつかのプロジェクトが進められている。STC・ESTC・NSTC 等々である。

明治時代は長い日本歴史の中でも特別な意味をもっている重要な転換期であり、明治時代を抜きにして日本の歴史は語れない。まさしくヨーロッパの歴史の中で、19世紀という時代が特に重要な意味を持っているのと同じである（その意味で NSTC に大きな意義がある）。このようなわが国の歴史のうえで特に重要な意味をもつ明治時代の活字資料が、紙の劣化等によって消滅しようとしている現在、これらの活字資料を何等かの方法によって保存し、後世に伝える責任が現代に生きている我々に課せられているのである。

早稲田大学は、幸い戦災及び震災を免れ、東京専門学校創設当時の蔵書を保有し、幾多の諸先輩の貴重な旧蔵書を所有している。明治期資料を保有する図書館としては、国立国会図書館等と並んで日本有数の図書館の1つである。その意味で

明治期資料を保存し後世に伝えるという大きな責任の一端を担っている。それ故現時点で敢えてこのプロジェクトを企画し遂行していこうと考えた訳である。

近代日本の原点ともいべき明治時代に刊行された資料の全容は、現在の段階では未だ充分にわかっていない。当時は地方における出版活動が盛んであり、出版物の流通が全国的な広がりを持っていなかったことを考えると、明治期の資料は日本全国に分散所蔵されているものと思われる。従って1館2館の図書館に所蔵されているもののみで明治期資料を網羅することは到底できないと考える。従ってこのプロジェクトを遂行するためには、日本全国の図書館の協力が不可欠の条件となる。いろいろな難しい問題点を内包しているにもかかわらず、現時点で敢えてスタートしたのは前述の酸性紙問題および明治期資料の全体像の解明という点から考えて、この課題に緊急に対応しなければならないと考えるからに他ならない。

明治時代は『過去のすべてのものがそこへ流れ込み、現在のあらゆるものがそこに根ざした』と言われている。このような重要な時代に生み出された記録文化の全容を明らかにすることは、明治研究はもとより、近代日本の研究にとってもきわめて重要なことだと思われる。関東大震災後、明治文化研究会が生まれ、吉野作造らによって「明治文化全集」刊行という偉業がなすとげられ、柳田泉・木村毅ら早稲田の先輩の先生がたもこれに協力、推進に力を尽された。これらは政治・経済・芸術・教育などの全分野にわたっての大事業であった。私たちはこれを現代の立場から継承、発展させ新しい技術を採用入れ、明治期に作り出された資料の全体像をさらに徹底的に明らかにするの必要を感じている。現代に生きる者の歴史への責任を果すという意味において、将来、このプロジェクトが全国的なものとして成長し、欧米における同種のプロジェクトと肩を並べられる日がくることを強く希望する。

2. 目的

新中央図書館着工を契機に、図書館として真に意義のある記念事業とすること。第1の目的はあくまで早稲田大学図書館所蔵のすべての明治期資料をマイクロ化して保存するためであり、販売を優先するものではない。従って撮影、製作は順次すべての明治期刊行物を対象としていくものとする。

- 1 早稲田大学所蔵明治期刊行物をすべてマイクロ化し、明治期資料を分離保存して後世に伝えること。
- 2 早稲田大学図書館所蔵の和書データベース作成のための遡及入力の一環として行うこと。
- 3 未所蔵明治期資料を可能な限り収集すること。
- 4 このプロジェクトを通じてわが国における資料保存学の確立を目指すこと。

3. 対象

早稲田大学所蔵明治期全資料

総数 約12万冊

単行書類 約6万冊

逐次刊行物類 約6万冊

4. 作成計画

1 期間

単行書類および逐次刊行物類それぞれ約6万冊をマイクロ化するためには、年間約4000冊を処理するとして15年間を必要とする。この15年間を3期に分け、5年で1期分を完了させるようなスケジュールにしたいと考える。それは、このような長期に亘るプロジェクトを完成させるためには、5年間毎にレビューし直し作成計画を見直す必要があると考えるからである。

2 撮影方法

マイクロフィッシュで作成する。

その理由は

- ① 1冊につき1枚のフィッシュでかなりの資料が撮影できること。
- ② 他機関の所蔵資料を追加し拡張してゆく場合に操作しやすいこと。
- ③ セット領布以外の個別領布にも対応しやすいこと。

5. その他

1 データベースの作成

早稲田大学図書館は、現在学術情報システムを構築中である。その一環として早稲田大学図書館が所蔵する明治期資料について電算入力を行うことは、和書についての遡及入力をスタートすることであり、学術情報システムの構築にむけて非常に重要な作業となる。わが国では未だ明治期刊行物のデータベースが存在していない。早稲田大学図書館が、部分的にせよ明治期資料についてのデータベースを構築する意義はきわめて大きいと考える。

2 リプリント版の作成

明治期資料をマイクロ化する今回の事業は、現物調査および書誌作成作業を前提としており、未知の文献が多数発掘されることが予想される。イギリスにおいて行われている19世紀刊本のマイクロ化事業 NSTC を例にとると、ある分野の専門研究者でさえ知らなかった文献が、半数近くを占めていたと言われる。明治期資料のマイクロ化を進めていく過程で新たに発掘された未知の文献を複製し、リプリント版として社会に公開することは、資料をマイクロ化してゆくこととともに、今回の重要な仕事の1つと考える。明治期の資料は数がきわめて少なくなっている。資料の消滅は明治文化のある意味での消滅でもある。このような明治文化の消滅を防ぎ、明治期研究の益々の活性化を図るうえで、発掘された未知の文献および重要文献のリプリント版を作成することは、きわめて意義深い仕事となる。

(やまもと のぶお 明治期資料マイクロ化事業室)